令和6年度　学校経営計画に対する最終評価

石川県立飯田高等学校

重点目標		具体的取組		実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
1	主体的・対話的で深い学びにより、知識・技能、思考力・判断力・表現力を育成する。	①	習熟度別の学習指導を推進し、個に応じた学力の伸長を図る。	模擬試験受験者の英数国総合偏差値で60以上10%、55以上20%、50以上50%の3つの項目のうち Ａ： 全て達成 Ｂ： ２つ達成 Ｃ： １つ達成 Ｄ： 達成なし	１年　B 60以上　14.7% 55以上　26.5% 50以上　41.2% ２年　D 60以上　1.8% 55以上　12.7% 50以上　30.9%	成　果：１１月進研模試では、１年生が全体的に育ってきている。 課　題：２年生の上位層が薄い。 改善策：学年会や進路連絡会を通して生徒の学習状況について情報共有し、模試結果に基づいて立てた指導方針に沿って、苦手科目、弱点分野を補強していく。
		②	予習・授業・復習のサイクルを確立し、自律的学習習慣を定着させる。	進路アンケートにおいて、授業外での学習時間の平均が、学年＋1時間を100と換算したとき Ａ： 70以上 Ｂ： 60以上 Ｃ： 50以上 Ｄ： 50未満	B 61%	成　果：４月、９月と比較すると１月のアンケートでは割合が増加している。特に１年生が増加している。 課　題：学力幅が大きく、一律での指導は難しい。 改善策：授業の充実に継続的に取り組み、隙間時間の活用や自主学習につなげる。また、ロイロノートの活用を通して生徒への適切な声掛けを行い、学習のモチベーションの維持・向上に努める。さらに、他を牽引するような上位層を育成する。
		③	公務員試験に対応できる幅広い知識と情報処理能力を育成する。	公務員模試でのBランク以上の生徒の割合が Ａ： 60%以上 Ｂ： 40%以上 Ｃ： 30%以上 Ｄ： 30%未満	D 10%	成　果：６回の実施のうち安定してBランク以上を達成できる生徒は10名中１名である。 課　題：指導方法の共有を徹底する。 改善策：年間スケジュール・教材・資料等を適切にまとめ、学校の指導力を向上させる。
		④	多角的に考察できる学習課題を精査し、取り組ませることで、思考力を育成する。	授業改善アンケート項目⑥「この授業で学力がつく」⑩「友人と意見を共有することにより理解を深めることができる」の肯定的評価が A:　90%以上　B:　80%以上 C:　70%以上　D:　70%未満	A 94.2%	成　果：第２回アンケートでは、⑥94.5%、⑩93.7%と肯定的評価であった。 課　題：学力の差が大きいため、指導に困難が生じている。 改善策：個々の学力に応じたきめ細やかな指導を行っていきたい。
		⑤	読書を通して、知識や教養を高め、生き方や社会問題を考えることで深い学びにつなげる。	図書室主催のイベントや探究学習などを通じて図書室の年間利用率が Ａ： 45%以上 Ｂ： 40%以上 Ｃ： 35%以上 Ｄ： 35%未満	C 37.8%	成　果：震災後の書物の整理も進み、ブックトークなどの図書イベント開催や授業での図書室の利用が増えたことで上半期より13ポイント利用率が増加した。 課　題：一度も図書を借りたことのない生徒がいる。 改善策：学校全体で読書週間などのイベントを開催し、図書にふれる機会を増やす。

学校関係者評価委員会の評価	・タブレット先行授業も大事だが、国語教育の基礎として、本や紙面媒体での指導もしていく必要があるのでは。 ・生徒の学力差が大きく開いているが、その対応はどのように行っているのか。 ・学習指導において生徒のモチベーションを上げる取り組みや手立ては重要であると考える。今後も各学年で補習や合宿等の取り組みを継続してほしい。また、模試へ取り組みも積極的に指導してほしい。
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善指導	・国語科の学習指導要領にも明記されているように、生徒への図書教育は必須である。本校では夏休みの課題として、読書コンクール等に出品させて指導している。 ・図書教育及びICT活用ともリンクするが、基本は従来通りの学習で紙媒体での指導を行っている。例えば、数学のグラフや立体等のイメージが湧きにくい生徒への手立てとして、ICTを活用し、可視化したものを教材とする場合もある。並行して、紙媒体での小テストなども行っている。 ・今年度は、学習合宿を行った。当初の1学年の偏差値は低く、家庭での学習習慣もなかった。そこから下位層も含めた指導を行った。具体的には、ICT端末を活用し、朝に課題を配信、その後端末上で個別添削を行う等の指導である。今後も生徒のモチベーションが向上する指導を模索していきたい。

重点目標		具体的取組		実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
2	効果的なICT機器の活用法を研究し、各教員の授業力を向上させるとともに、そのノウハウの共有によって学校全体の教育力を高める。	①	GIGA校内研修年間計画に基づいて研修を進める。	授業で年間5回以上1人1台端末を用いた授業をした教員が A： 90%以上 B： 80%以上 C： 70%以上 D： 70%未満	A 100%	成　果：授業に一人一台端末を用いた授業をする教員が増えた。さらにクラウド上での情報共有を推進する教員も増えた。 課　題：利用はしているが、必要な場面に的確なツールを使用できるようにする。 改善策：定期的に研修を行い、教員が使用するツールが増加するようにする。
		②	生徒の主体的な学習姿勢を涵養するため、タブレットを用いた授業を推進する。	1人1台端末を活用した授業では、主体的に学習しようとする意欲が高まると感じた生徒が A： 90%以上 B： 80%以上 C： 70%以上 D： 70%未満	A 91.0%	成　果：「あてはまる」64%「だいたいあてはまる」27%と肯定的な回答が多い。 課　題：やや形骸化する傾向にある、研修を深めていきたい。 改善策：教員研修会を定期的に開催し、新たな技術習得に努める。
		③	ICT機器の活用によりペーパーレス化を図るなどして、業務の効率化を図る。	ICT機器の活用により業務の平準化・効率化が進んだと感じる教員が A： 95%以上 B： 85%以上 C： 75%以上 D： 75%未満	B 91.0%	成　果：情報周知や、資料の共有が進んで効率は上がっている。 課　題：技術の習得に追われていると感じる教員がいるようである。 改善策：研修を詰み、技術の習得に努め、効率化できるよう鍛錬する。

学校関係者評価委員会の評価	特記事項なし
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善指導	

重点目標		具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
3	学校行事や部活動、ゆめかな等の活動を通して地元中学校や地域社会と連携し、円滑な社会生活を送る資質を養い、人間力を育む。	① HR活動や委員会活動を通して、集団における人間力を育む。	意見交換を行い、協働した取り組みが日常的にできたと考える生徒の割合が A： 90%以上 B： 80%以上 C： 70%以上 D： 70%未満	A 91.1%	成　果：９月(91.0%)、１月(91.9%)で到達度が90%を超えている。 課　題：生徒が主体的・協働的に取り組めるよう全教職員が支援・指導を継続する。 改善策：多少時間がかかっても生徒同士が活動する場面をより増やしていく。
		② 総合的な探究の時間の学習を通して、外部伴走者や地域社会と協働して課題解決へと向かう人材を育成する。	金沢大学能登学舎(市内三崎町)・NPO法人ガクソー(市内飯田町)・探究ルーム(校内、外部の方が滞在しているとき)を利用した生徒の割合が A： 50%以上 B： 40%以上 C： 30%以上 D:　30%未満	A 69.1%	成果：１年生51名、２・３年生108名（16グループ）が総合的な探究の時間において外部伴走者の助けを借りながら、探究学習を進めることができた。 課題：外部伴走者と関わる機会を増やし、さらなる協働的な学びを目指す。 改善策：近隣の高校や大学等、外部伴走者の幅を広げられるよう、外部機関との折衝を重ねる。
		③ 地元産業に貢献する人材育成のため企業見学会や講演会を実施する。	地元への興味・関心や貢献意欲が高まった生徒が A： 80%以上 B： 70%以上 C： 60%以上 D： 60%未満	C 61.0%	成果：震災の影響により、企業見学・インターンシップなどの実施が難しく、「ふるさと企業を知る会」(1・2年ビジネスコース33名参加)後のアンケートにおいても、現段階で地元就職を希望する生徒は10%未満となっている。 課題：珠洲市・能登町の各種公務員は現段階で充足しておらず、今年度減少した民間求人も今後増加しても、充足に貢献する人数が希望する可能性は低い。 改善策：公務員・地元企業の求人について、情報の収集・提示を強めていく必要がある。
		④ 挨拶、身だしなみ、交通ルール遵守など、社会生活の基盤を身に付ける。また、生徒一人一人が「いじめのない学校づくり」を心がける。	集団や個々の場面でも、いじめのない学校づくりを意識して規則や規律を守ることができた生徒の割合が A： 90%以上 B： 80%以上 C： 70%以上 D： 70%未満	A 98.1%	成　果：９月(96.3%)、１月(98.1%)で到達度が90%を超えている。 課　題：ごく一部が身だしなみが乱れている場面もある。 改善策：継続して全教員が指導にあたる。
		⑤ ボランティア活動や地域行事への参加を積極的に進め、地域社会の一員として人間力を育む。	地域行事やボランティア活動を通して地域に関わろうとする意欲が高まった生徒が A： 80%以上 B： 70%以上 C： 60%以上 D： 60%未満	B 75.9%	成　果：９月(85.8%)、１月(75.9%)で到達度が70%を超えている。 課　題：震災もあり関心が高まっていることもあるが意欲の継続が課題である。 改善策：活動を通じて成長することを広く周知し多くの生徒が携わるように工夫する。
		⑥ 地域学や観光ビジネスなどの授業を通して、地域社会との連携を深め、異世代との交流を持つことでコミュニケーション能力を育てる。	異世代の方との交流を深めることで、コミュニケーション能力を高めることが出来たと思う生徒の割合が A： 90%以上 B： 80%以上 C： 70%以上 D： 70%未満	評価できず	本年度震災後ではありましたが、これまで行ってきた活動を少しでも行いたいと思い、目標を設定いたしました。しかし、職員の人数が減ったことも追い打ちをかけ、地域学Ⅰ,Ⅱ、観光ビジネスの授業では、これまでの活動が全くできませんでした。この事から、目標に立てた内容を評価するようなアンケートを実施することはできませんでした。目標を立てる時の、現状分析の甘さが原因です。

学校関係者評価委員会の評価	・今年度は学校全体として大変な1年だったが、模試の結果等に反映されているように生徒も落ち着いて勉強できるようになってきたのではと思う。ビジネスコースとして、一定期間のインターンシップ等を設けて企業と生徒との関りを深めていけば、今後、地元企業への興味や就職希望者の増加につながるのでは。 下半期の数字としての結果は下がっているが、やはり、震災直後は飯田高校生が頑張って積極的にボランティアをしたという現状がある。数字だけにこだわらず、生徒の評価をしてあげてほしい。
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善指導	・今後も進路実現のために外部との連携も強化し、対応していきたい。 ・生徒会を中心にさまざまなボランティア活動への参加を促していきたい。

重点目標		具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
4	教職員自らが効率的な業務や指導法の改善に努め、ワークライフバランスを実現する。	① 若手教員早期育成プログラムの推進と併せ、研究授業や互見授業により授業改善を図る。	教員として成長できたと感じられる。 (ア)よくあてはまる　(イ)あてはまる (ウ)あまりあてはまらない　(エ)あてはまらない (ア)が Ａ： 80%以上　Ｂ： 70%以上 Ｃ： 60%以上　Ｄ： 60%未満	A 100%	成　果：若プロ対象となる全若手教員が、成長できたと感じていた。 課　題：現在の割合を減少させず、さらなる指導力向上を目指したい。 改善策：業務における不安要素や悩みを調査し、解決できる講習を設定していく。
		② 授業改善アンケートの結果をもとに授業改善を図り，分かりやすい授業を展開する。	授業が分かりやすいと感じた生徒が Ａ： 90%以上 Ｂ： 80%以上 Ｃ： 70%以上 Ｄ： 70%未満	B 87.5%	成　果：授業改善アンケートでは、Ａ「あてはまる」Ｂ「だいたいあてはまる」の肯定的評価が多い。 課　題：この割合を減らさないよう、さらなる向上を目指したい。 改善策：他教科間の横断的授業を展開するなど、魅力ある授業づくりをしていきたい。
		③ 研修などを通してカウンセリングマインドを涵養し、多様な生徒への指導力を高める。	研修会で得た知識などを実践しようとしている教員が Ａ： 90%以上 Ｂ： 80%以上 Ｃ： 70%以上 Ｄ： 70%未満	A 100%	成　果：今年度は開催を昨年度よりもさらに早め7月に行った。研修会で得た知識などを実践してみたいと「思う」「まあまあ思う」と答えた回答が100%であった。 課　題：さらに充実した研修会を目指したい。 改善策：アンケートをもとに今後の研修会についてテーマを検討する。

学校関係者評価委員会の評価	特記事項なし
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善指導	